

第55回 古代史を解明する会

伊勢神宮とその謎

2026年2月28日
可児俊信



伊勢神宮の概要

伊勢神宮の位置づけ

神社本庁が本宗と仰ぐ特別な神社

日本全国に数多くある神社の中で、古来、特別な神社として敬われてきたのが伊勢神宮です。正式には「神宮」と申し上げ、三重県伊勢市とその周辺に鎮座する125のお社の総称です。その中心は、皇室のご祖先である天照大御神をおまつりする皇大神宮(内宮)と、天照大御神のお食事をつかさどり、衣食住をはじめ産業の守り神である豊受大御神をおまつりする豊受大神宮(外宮)です。

今から2000年以上前の第11代垂仁天皇の御代、天照大御神のお告げにより皇大神宮がまつられ、約500年後の第21代雄略天皇の御代には、豊受大御神が伊勢に迎えられました。

現在は神社本庁の本宗(ほんそう。全ての神社の上に立つ神社)であり、「日本国民の総氏神」とされる。

(神社本庁HP)

伊勢神宮の構成社(125社)

区分	神社名	主祭神	所在地	
別宮	正宮 皇大神宮	天照大神	三重県伊勢市宇治館町	
	荒祭宮	天照大神荒魂	(内宮境内)	
	月讀宮	月読	三重県伊勢市中村町	
	月讀荒御魂宮	月読荒魂	(月讀宮境内)	
	伊佐奈岐宮	イザナキ	(月讀宮境内)	
	伊佐奈弥宮	イザナミ	(月讀宮境内)	
	瀧原宮	天照大神荒魂		
	瀧原竝宮	天照大神和魂	(瀧原宮境内)	
	伊雑宮	天照大神御魂		
	風日祈宮	シナツ彦/シナトベ	(内宮境内)	
	倭姫宮	倭姫		
	内宮	朝熊神社	大歳/苔虫神/朝熊水神	
		朝熊御前神社	朝熊御前神	
園相神社		ソナヒ彦/御前神		
鴨神社		イシコロワケ/御前神		
田乃家神社		大神御瀧川神		
田乃家御前神社		大神御瀧川神		
蚊野神社		大神御蔭川神		
蚊野御前神社		御前神		
湯田神社		大歳御祖/御前神		
大土御祖神社		大国玉/ミズササラ彦/ミズササラ姫	大歳の子孫	
国津御祖神社		宇治姫/田村姫		
朽羅神社		千依姫/千依彦		
宇治山田神社		山田姫		
摂社		津長神社	スナガ姫(大水上命の御子神)	
		堅田神社	佐見都姫	
		大水神社	大山祇御祖	
		江神社	長口女/大歳御祖/ウカノミタマ	スサノオの子
		神前神社	荒前姫	
		粟皇子神社	スサノオ御魂道主	
		川原神社	月読御魂	
		久具都比賣神社	久具都姫/久具都彦/御前神	大水上の子
		奈良波良神社	ナラハラ姫	
		棒原神社	天須婆留女命御魂/御前神	
	御船神社	大神御蔭川神		
	坂手国生神社	高水上		
	狭田国生神社	速川彦/速川姫/山末御魂		
	多岐原神社	マナコ神		

区分	神社名	主祭神	
末社	滝祭神	滝祭大神	
	興玉神	興玉神	
	宮比神	宮比神	
	屋乃波比伎神	屋乃波比伎神	
	御酒殿神	御酒殿神	
	御稻御倉神	御稻御倉神	
	由貴御倉神	由貴御倉神	
	四至神	四至神	
	神服織機殿神社	神服織機殿鎮守神	
	神服織機殿神社末社八所	神服織機殿鎮守御前神	
	神麻統機殿神社	神麻統機殿鎮守神	
	神麻統機殿神社末社八所	神麻統機殿鎮守御前神	
	御塩殿神社	御塩殿鎮守神	
	饗土橋姫神社	宇治橋鎮守神	
	大山祇神社	大山祇神	
	子安神社	コノハナサクヤ姫	
	瀧原宮 所管社	若宮神社	若宮神
		長由介神社	長由介神
		川島神社	川島神
	伊雑宮 所管社	佐美長神社4社	大歳
佐美長御前神社		佐美長御前神	

正宮(ショウグウ)



区分	神社名	主祭神	所在地	
正宮	豊受大神宮	豊受大御神	三重県伊勢市豊川町	
	別宮	多賀宮	豊受大御神荒魂	(外宮境内)
		土宮	大土御祖神	(外宮境内)
		月夜見宮	月読/月読荒魂	三重県伊勢市宮後
		風宮	シナツ彦/シナトベ	(外宮境内)
摂社	草奈伎神社	御剣杖神		
	大間国生神社	大若子/乙若子		
	度会国御神社	彦国見賀岐建興束		
	度会大国玉比賣神社	大国玉/ミズササラ姫		
	田上大水神社	小事神主		
	田上大水御前神社	宮子		
	志等美神社	ククノチ神		
	大河内神社	大山祇		
	清野井庭神社	草野姫		
	高河原神社	月読御魂		
	河原神社	川神		
	河原淵神社	澤姫		
	山末神社	大山津姫		
	宇須乃野神社	ウスノメ		
	御食神社	水戸ミケツ神		
小俣神社	ウカノミタマ	スサノオの子		
末社	伊我理神社	伊我利姫		
	縣神社	縣神		
	井中神社	井中神		
	打懸神社	打懸名神		
	赤崎神社	荒崎姫		
	毛理神社	木神		
	大津神社	葦原神		
	志宝屋神社	シオツチノオジ		
所管社	御酒殿神	御酒殿神		
	四至神	四至神		
	上御井神社	上御井鎮守神		
	下御井神社	下御井鎮守神		

伊勢神宮関連文献

文献名	完成時期	編者	内容
古事記	712年		
日本書紀	720年		
皇大神宮儀式帳 豊受皇大神宮儀式帳	804年	大宮司・大中臣真 継（おおなかとみ のまつぎ）	伊勢神宮内宮の年中行事や神宝、遷宮の記録
二所太神宮例文	10世紀		伊勢神宮の別宮・外宮（豊受大神宮）と内宮（皇大神宮）の参拝作法や 祭祀規定などを記した古文書の例文集・典拠集
太神宮諸雑事記	平安末期	荒木田徳雄	皇大神宮の鎮座から延久元年(1069年)に至るまで神宮の重要事件を編年 式に記録
倭姫命世記	鎌倉中期	度会行忠（伊勢神 宮禰宜、伊勢神道 提唱者）ら	「神道五部書」。倭姫命が天照大神を奉じて各地を巡幸した記録
天照坐伊勢二所皇太神宮御鎮座 次第記			「神道五部書」。内宮・外宮の鎮座次第や別宮の由緒等
伊勢二所皇太神御鎮座伝記			「神道五部書」。内宮・外宮の鎮座や神鏡等の由来等
豊受皇太神御鎮座本記			「神道五部書」。外宮の鎮座や祭祀等
造伊勢二所太神宮宝基本記			「神道五部書」。両宮の殿舎の造営や形式などについて
二所皇太神宮遷宮次第記			16世紀

神道五部書(しんとうごぶしょ) 伊勢神道(度会神道)の経典。外宮を内宮と同等以上とすることを目的に、豊受大神を天之御中主神および国之常立神と同一神とすることで、天照大神をしのぐ普遍的な神格であることを主張

式年遷宮の開始

- ・672年(天武元年6月)「朝明郡で天照大神を遥拝した」 出所:日本書紀
- ・681年(天武10年1月)「畿内および諸国に詔して、諸々の神社の社殿の修理をさせた」出所:日本書紀
- ・「天武天皇の御願により式年遷宮は開始された」出所:二所太神宮例文
- ・「二所太神宮の遷宮は二十年に一度、まさに遷御せしめ奉るべし」出所:太神宮諸雑事記
- ・690年(持統4年) 太神宮御遷宮 出所:太神宮諸雑事
- ・692年(持統6年) 「豊受太神宮御遷宮。いずれも東御宮地。始めて遷御なり。」 出所:太神宮諸雑事記
- ・692年(持統6年) 持統天皇の伊勢行幸 出所:日本書紀

古代文献に見る伊勢神宮の歴史

時期	出所	記述
天孫降臨	古事記	天照大御神と思金は、五十鈴宮に鄭重に祭ってある。登由氣神は、度会の外宮に鎮座している。手力男は、伊勢の佐那那県に鎮座している。猿田毘古は、阿耶訶におられるとき、漁をされていて、比良夫貝にその手をはさまれて、海水に沈み溺れなされた。
天孫降臨	日本書紀	猿田彦が答えた。「私は伊勢の狭長田の五十鈴の川上に行くでしょう」
垂仁紀	古事記	倭姫が伊勢の大神宮を祭った。原文:倭比賣命者、拜祭伊勢大神宮也。
垂仁紀	日本書紀	天照大神を豊稻入姫命から離して、倭姫命に託された。倭姫命は大神を鎮座申し上げるところを探し、宇陀の篠幡に行った。さらに引返して近江国に入り、美濃をめぐって伊勢国に至った。そのとき天照大神は、倭姫命に教えて言われたのが、「伊勢国はしきりに波が打ち寄せる、傍国の美しい国である。この国にいたいと思う」。そこで大神のことばのままに、その祠を伊勢国に立てられた。そして齋宮を五十鈴川のほとりに立てた。これを磯宮という。天照大神が、初めて天より降りられたところである。 一説には、天皇は、倭姫命を依代として、天照大神に差し上げられた。それで倭姫命は、天照大神を磯城の神木の本にお祀りした。その後、神のお告げにより、二十六年十月、甲子の日、伊勢国の渡遇宮にお移した。
景行20年	日本書紀	五百野皇女を遣わして、天照大神を祭らせた。
景行紀	古事記	勅命を受けて東国に下って行かれるとき、伊勢神宮に参って、神殿を礼拝し、やがてその叔母の倭比売に述べた。(略)倭比売は草薙剣をお授けになり、… 原文:故受命罷行之時、参入伊勢大御神宮、拜神朝廷、即白其姨倭比賣命者 (略)倭比賣命賜草那藝劔那藝二字以音
景行40年	日本書紀	冬十月二日、日本武尊は出発された。七日、寄り道をして、伊勢神宮を拝まれた。倭媛命にお別れの言葉を述べ、「今、天皇の命を承って東国に行き、諸々の反乱者を討つことになりました。それで、ご挨拶に参りました」。 倭媛命は草薙剣を取って、日本武尊に授けて言われた。「よく気をつけ、決して油断をしないように」
雄略元年	日本書紀	稚足姫皇女をお生みになった。この皇女は伊勢大神祠の齋宮となられた。
雄略21年	止由氣宮儀式帳	雄略天皇の夢に天照大御神が現れ、「自分一人では食事が安らかにできないので、丹波国の等由氣大神を近くに呼び寄せるように」と神託。大神宮諸雑事記の第一「雄略天皇」の条に「即位廿一年丁巳」、すなわち雄略天皇21年とある

伊勢神宮の様々な表記 五十鈴宮、伊勢大神宮、伊勢大神祠

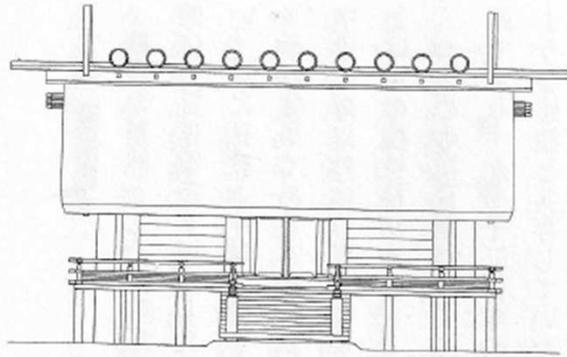
古代文献に見る伊勢神宮の歴史

継体元年	日本書紀	竟角皇女(ささげ)をお生みになった。この人は伊勢大神祠の齋宮をされた。
欽明2年	日本書紀	第一を大兄皇子といい、第二を磐隈皇女という。当初は伊勢大神に仕えられた。後に、茨城皇子に犯されたので解任された。
敏達7年	日本書紀	うじきの皇女を伊勢の祠とした
敏達14年	日本書紀(用明紀)	須加手姫皇女を伊勢神宮に遣わし、齋宮として天照大神にお仕えさせられた。この皇女は、この天皇の御時から推古天皇の御代まで皇大神宮にお仕えし、後年、母の里の葛城に退いて亡くなられた、と推古天皇紀に見える。ある本に、この皇女は三十七年間も大神にお仕えした後、自ら退いて亡くなられたとある。
天武元年	日本書紀	六月二十六日、朝、朝明郡(三重県三重郡)の迹太川(とおかわ)のほとりで、天照大神を遥拝された。
天武2年	日本書紀	夏四月十四日、大来皇女を伊勢神宮の齋王にされるために、まず泊瀬の齋宮にお住ませになった。ここはまず身を潔めて、次第に神に近づくためのところである。
天武	二所太神宮例文	「常限二廿箇年、一度新宮遷奉。造宮使長官一人、次官一人、判官一人、主典二人、木工長上一人、番上工珊人参入来。」 (常に二十年を限りとして、一度新宮へ遷し奉る。造宮使として長官1名、次官1名、判官1名、主典2名、木工長上1名、番上工らが参向する。)
天武	太神宮諸雑事記	「二所太神宮之御遷宮事、廿年一度應奉令遷御、立爲長例也云々」(二所太神宮の遷宮のことは、20年に一度遷御を行うべきであり、これを永く変わらぬ例とする)(朱雀3年)
持統4年	二所太神宮例文	太神宮御遷宮(白鳳13年)
持統4年	太神宮諸雑事記	太神宮御遷宮
持統6年	二所太神宮例文	外宮御遷宮(朱鳥2年)
持統6年	太神宮諸雑事記	豊受太神宮遷宮
持統6年	日本書紀	二月十一日、諸官に詔して、「三月三日に伊勢に行こうと思う」。この取りきめに関した陰陽博士である沙門法蔵、道基に、銀二十両を賜わった。この日、中納言直大貳である三輪朝臣高市麻呂が、上奏して直言し、天皇の伊勢行幸が、農時の妨げになることを諫め申した。 三月三日、浄広肆広瀬王、直広参当麻真人智徳、直広肆紀朝臣弓張を、行幸中の留守官に任せられた。このとき、中納言の大三輪朝臣高市麻呂は、職を賭して重ねて諫め、「農繁の時の行幸は、なさるべきではありません」 六日、天皇は諫めに従われず、ついに伊勢に行幸された。
文武2年	続日本紀	多氣大神宮を度会郡に移す

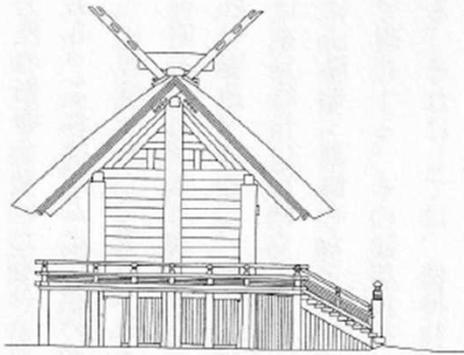
伊勢神宮の謎

心御柱
式年遷宮
倭姫の巡行
斎王制度
内宮は3柱
都から遠距離にある
内宮・外宮の二宮制

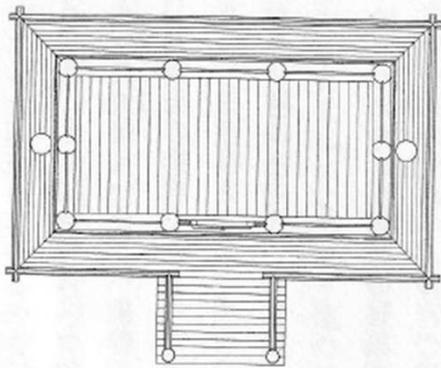
心御柱(シンノミハシラ)



正面



側面



平面

心御柱は、伊勢神宮の内宮、外宮の本殿床下に床下中央部に埋め込まれた柱
 内宮・外宮以外の別宮にも心御柱があるかは確認できない
 床材には届いておらず、建物を支える役割はない。長さ6尺
 内宮の御柱は地中に埋められている
 外宮の御柱は地上から2尺ほど飛び出している

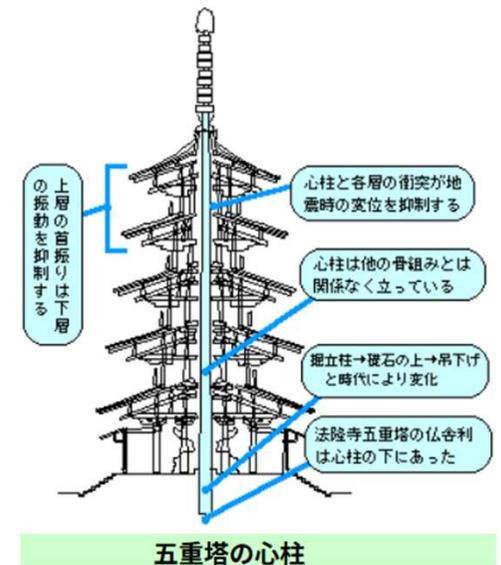
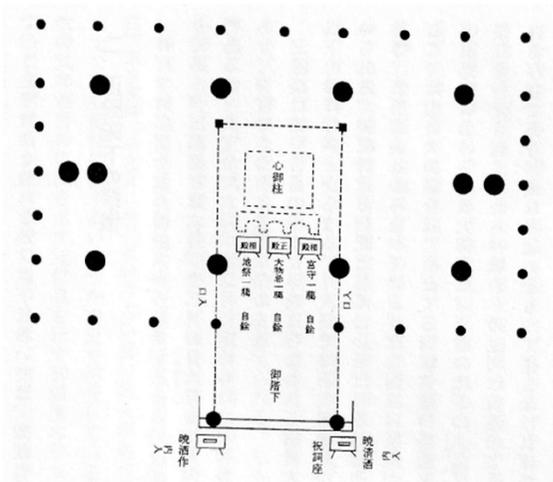
心御柱の覆構造物



筆者撮影

心御柱の存在理由

- ・神籬(ヒモロギ)説
- ・正殿建設の定位置説
- ・男根説
- ・地鎮祭の名残説



式年遷宮履歴

	内宮遷宮年		外宮遷宮				間隔(内宮)	間隔(外宮)
第1回	690	9月16日	692	9月15日	持統天皇4年	持統天皇6年		
第2回	709	9月16日	711	9月15日	和銅2年	和銅4年	19	19
第3回	729	9月16日	732	9月15日	天平元年	天平4年	20	21
第4回	747	9月16日	749	9月15日	天平19	天平勝宝元年	18	17
第5回	766	9月16日	768	9月15日	天平神護2年	神護景雲2年	19	19
第6回	785	9月18日	787	9月15日	延暦4年	延暦6年	19	19
臨時遷宮	792		792		延暦11		7	5
第7回	810	9月16日	812	9月15日	弘仁元年	弘仁3年	18	20
第8回	829	9月16日	831	9月15日	天長6年	天長8年	19	19
第9回	849	9月16日	851	9月15日	嘉祥2年	仁寿元年	20	20
第10回	868	9月16日	870	9月15日	貞観10年	貞観12年(19	19
第11回	886	9月16日	889	9月15日	仁和2年	寛平元年	18	19
第12回	905	9月16日	907	9月15日	延喜5年	延喜7年	19	18
第13回	924	9月16日	926	9月15日	延長2年	延長4年	19	19
第14回	943	9月16日	945	12月15日	天慶6年	天慶8年	19	19
第15回	962	9月16日	964	9月15日	応和2年	康保元年	19	19
第16回	981	9月17日	983	9月15日	天元4年	永観元年	19	19
第17回	1000	9月16日	1002	9月15日	長保2年	長保4年	19	19
第18回	1019	9月17日	1021	9月15日	寛仁3年	治安元年	19	19
第19回	1038	9月16日	1040	9月15日	長暦2年	長久元年	19	19
第20回	1057	9月16日	1059	9月15日	天喜5年	康平2年	19	19
第21回	1076	9月16日	1078	9月15日	承保3年	承暦2年	19	19
第22回	1095	9月16日	1097	9月15日	嘉保2年	承徳元年	19	19
第23回	1114	9月16日	1116	9月15日	永久2年	永久4年	19	19
第24回	1133	9月16日	1135	9月15日	長承2年	保延元年	19	19
第25回	1152	9月16日	1154	9月19日	仁平2年	久寿元年	19	19
臨時遷宮	1169		1169		観応元年		17	15
第26回	1171	9月16日	1173	9月15日	承安元年	承安3年	2	4
第27回	1190	9月16日	1192	9月15日	建久元年	建久3年	19	19
第28回	1209	9月16日	1211	9月15日	承元3年	建暦元年	19	19
第29回	1228	9月16日	1230	9月15日	安貞2年	寛喜2年	19	19
第30回	1247	9月16日	1249	9月26日	宝治元年	建長元年	19	19
第31回	1266	9月16日	1268	9月15日	文永6年	文永5年	19	19
第32回	1285	9月16日	1287	9月18日	弘安8年	弘安10年	19	19

	内宮遷宮年		外宮遷宮				間隔(内宮)	間隔(外宮)
第33回	1304	12月22日	1306	12月20日	嘉元2年	徳治元年	19	19
第34回	1323	9月16日	1325	9月16日	元亨3年	正中2年	19	19
第35回	1343	12月28日	1345	12月27日	興国4年	興国6年	20	20
第36回	1364	2月16日	1380	2月8日	正平19年	天授6年	21	35
第37回	1391	12月20日	1400	2月28日	元中8年	応永7年	27	20
第38回	1411	12月	1419	12月21日	応永18	応永26年	20	19
第39回	1431	12月28日	1434	9月15日	永享3年	永享6年	20	15
第40回	1462	12月27日	1563	9月23日	寛正3年	永禄6年	31	129
第41回	1585				天正13			123
第42回	1609				慶長14			24
第43回	1629				寛永6年			20
第44回	1649				慶安2年			20
第45回	1669				寛文9年			20
臨時遷宮	1683	3月10日			天和3年			14
第46回	1689				元禄2年			6
第47回	1709				宝永6年			20
第48回	1729				享保14年			20
第49回	1749				寛延2年			20
第50回	1769				明和6年			20
第51回	1789				寛政元年			20
第52回	1809				文化6年			20
第53回	1829				文政12年			20
第54回	1849				嘉永2年			20
第55回	1869				明治2年			20
第56回	1889				明治22年			20
臨時遷宮	1900	10月2日			明治33年			11
第57回	1909				明治42年			9
第58回	1929				昭和4年			20
第59回	1953				昭和28年			24
第60回	1973				昭和48年			20
第61回	1993				平成5年			20
第62回	2013				平成25年			20

遷宮:本殿を新築・造替・修理する際にご神体を仮の社殿や新しい社殿へお遷しする神事

遷座: 本殿を建て替えずに神体だけを一時的に移すこと。

伊勢神宮以外の式年遷宮・式年造替(ゾウタイ)

神社名	所在地	主な祭神	式年頻度
出雲大社	島根県出雲市	大国主大神	およそ60年
賀茂別雷神社(上賀茂神社)	京都府京都市北区	賀茂別雷神	21年
賀茂御祖神社(下鴨神社)	京都府京都市左京区	賀茂建角身命、玉依媛命	21年
春日大社	奈良県奈良市	武甕槌命、経津主命 他	20年
鹽竈神社	宮城県塩竈市	鹽土老翁神、武甕槌神、経津主神	20年
香取神宮	千葉県香取市	経津主大神	20年
鹿島神宮	茨城県鹿嶋市	武甕槌大神	20年
住吉大社	大阪府大阪市住吉区	住吉大神(底筒男命 他)	20年
穂高神社	長野県安曇野市	穂高見命	20年
香良洲神社	三重県津市	稚日女尊	20年

・出雲大社
1744年の式年遷宮までは完全建替。
それ以降は修造(使えるものは残す)。

・上賀茂神社
国宝なので建替遷宮はできない

・春日大社
国宝なので式年造替(修理)

・鹽竈神社
1704年から式年遷宮(修理・補修)を開始

・住吉大社
1810年以降、建替は行われていない

・香取神宮
戦国時代から行われていない

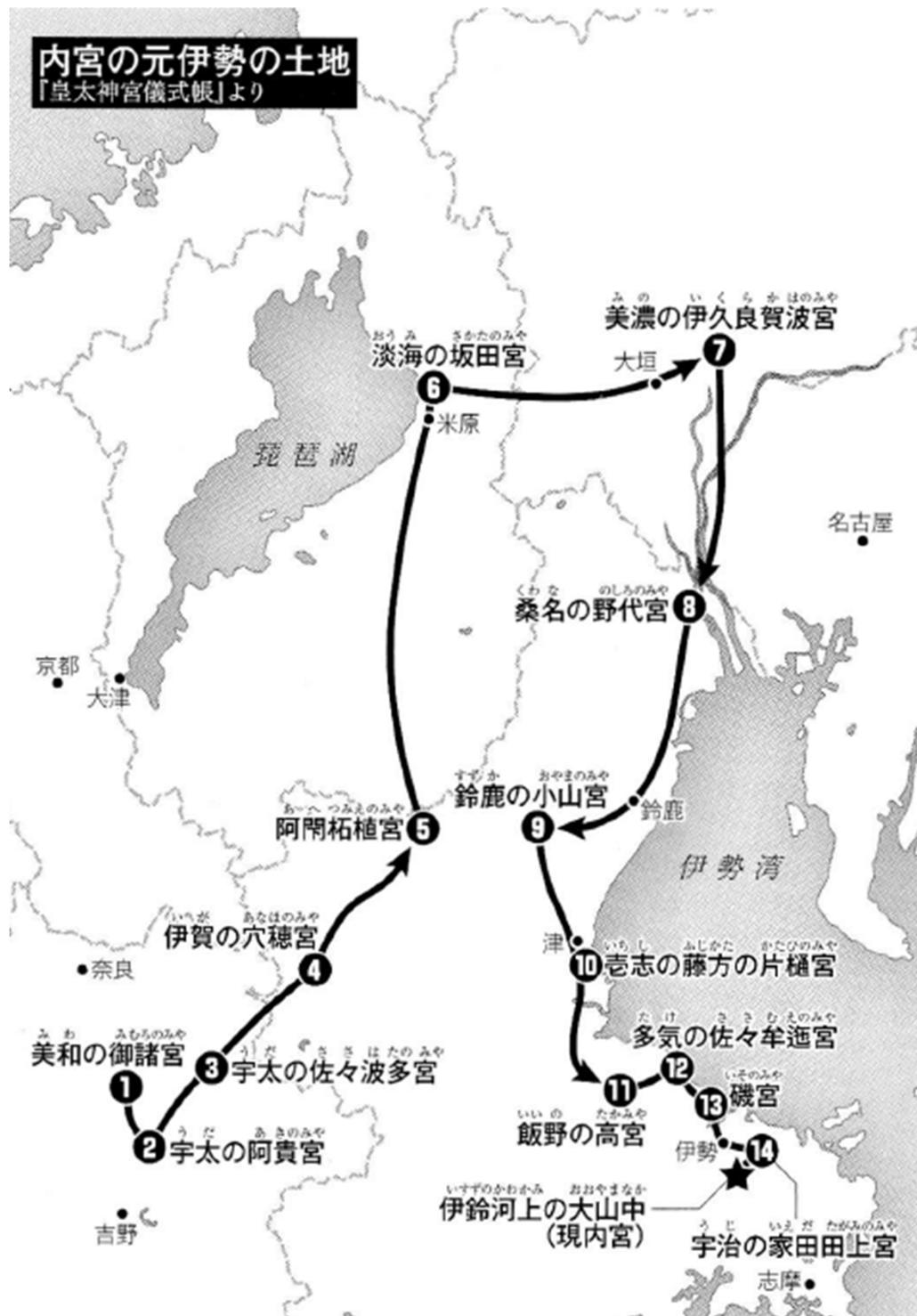
・鹿島神宮
平安の頃以降、行なわれていない

・香良洲神社 1885年から式年遷宮開始。現在は式年遷座(移築)する

伊勢神宮の式年遷宮が20年間隔である理由

- ・木造による耐久年数説
- ・貯蔵されている糶(ほしい)の保存限界説
- ・技術伝承説
- ・壁木材の乾燥縮小限界説

倭姫巡行図(皇大神宮儀式帳)



出所：黒田龍二「纏向から伊勢・出雲へ」学生社

倭姫巡行図(倭姫命世記)



出所：杉下 潤二「幻の邪馬台国・熊襲国(第14話)」あさぎり町ふるさと関西会

倭姫巡行

古事記		日本書紀		日本書紀異伝		皇大神宮儀式帳	倭姫命世記					
紀年	神社名	紀年	場所	紀年	場所	神社名		紀年	姫	神社名	比定社	現在地
		崇神	6 倭笠縫邑	垂仁	25 磯城			1 崇神	6 豊鋤入姫	笠縫邑	檜原神社	奈良県桜井市
								2 崇神	39 豊鋤入姫	吉佐宮	籠神社	京都府宮津市
								3 崇神	43 豊鋤入姫	伊豆加志本宮	興喜天満神社	奈良県桜井市
								4 崇神	51 豊鋤入姫	名草浜宮	日前国懸神宮	和歌山市
								5 崇神	54 豊鋤入姫	名方浜宮	伊勢神社	岡山市
								6 崇神	58 豊鋤入姫	御室嶺上宮	大神神社（高宮神社）	奈良県桜井市
								7 崇神	60 倭姫	宇多秋宮	阿紀神社	奈良県宇陀市
		垂仁	25 兎田篠幡			宇太佐佐波多宮		8 崇神	60 倭姫	佐佐波多宮	篠畑神社	奈良県宇陀市
								9 崇神	64 倭姫	名張市守堂	宇流富志禰神社/蛭子神社	三重県名張市
						伊賀穴穂宮		10 崇神	66 倭姫	穴穂宮	神戸神社	三重県伊賀市
						阿閉柘植宮		11 垂仁	2 倭姫	敢都美恵宮	都美恵神社	三重県伊賀市
								12 垂仁	4 倭姫	甲可日雲宮	垂水頓宮跡	滋賀県甲賀市
			近江国			淡海坂田宮		13 垂仁	8 倭姫	坂田宮	坂田神明社	滋賀県米原市
			美濃国			美濃伊久良賀波宮		14 垂仁	10 倭姫	伊久良河宮	天神神社	岐阜県瑞穂市
								15 垂仁	14 倭姫	中嶋宮	酒見神社	愛知県一宮市
						桑名野代宮		16 垂仁	14 倭姫	桑名野代宮	野志里神社	三重県桑名市
						鈴鹿小山宮		17 垂仁	14 倭姫	奈具波志忍山宮	布氣皇館太神社/忍山神社	三重県亀山市
						一志藤方片樋宮		18 垂仁	18 倭姫	藤方片樋宮	加良比乃神社	三重県津市
						飯野高宮		19 垂仁	22 倭姫	飯野高宮	神山神社/神戸神館神明社	三重県松阪市
						多気佐々夫江宮		20 垂仁	22 倭姫	佐佐牟江宮	竹佐々夫江神社	三重県多気郡
						磯宮		21 垂仁	25 倭姫	伊蘇宮	磯神社	三重県伊勢市
								22 垂仁	25 倭姫	瀧原宮	瀧原宮	三重県大紀町
								23 垂仁	25 倭姫	矢田宮	矢田宮跡	三重県伊勢市
						宇治家田田上宮		24 垂仁	25 倭姫	家田田上宮	神宮神田	三重県伊勢市
								25 垂仁	25 倭姫	奈尾之根宮	津長神社/宇治山田神社	三重県伊勢市
崇神	伊勢大神宮		磯宮	垂仁	26 渡遇宮	五十鈴宮		26 垂仁	26 倭姫	五十鈴宮	伊勢神宮（内宮）	三重県伊勢市

出所：晶文社「元伊勢・倭姫命を訪ねて」

倭姫宮

伊勢神宮の別宮。1923年(大正12年)に創建。

明治以前は倭姫命を祀る神社は作られなかった。

1887年(明治20年)頃 宇治山田町住民を中心に、倭姫命を祀る神社を創立すべきという声が高まった。

1912年(大正元年) 宇治山田市長が先頭にたち倭姫命を祀る神社の創立の許可を国会に請願

1919年(大正8年) 帝国議会で創立の予算が可決

1921年(大正10年) 内宮別宮としての創立が決定

1923年(大正12年) 外宮と内宮の間に近い倉田山にて鎮座祭が執り行われ創建



筆者撮影

斎王一覧

斎王制度

・『延喜式』によれば、斎王は、天皇が即位すると未婚の内親王（または女王）の中から、卜定（ぼくじょう）と呼ばれる占いの儀式で選定

・斎王になると、宮中に定められた初斎院（しょさいいん）に入り、翌年の秋に都の郊外の野宮（ののみや）に移り潔斎の日々を送り身を清めました。

その翌年9月に、伊勢神宮の神嘗祭に合わせて都を旅立ちました。出発日の朝、斎王は野宮を出て葛野川（現在の桂川）で禊を行い、大極殿での発遣の儀式に臨みます。

・大極殿で天皇は、斎王の額髪に小さな櫛を挿し、「都の方におもむきたもうな」と告げます。平安文学では「別れのお櫛」と呼ばれています。

・倭姫命など伝承的な斎王を除き、最初の斎王は天武天皇の娘・大来皇女。

・制度が廃絶する後醍醐天皇の時代（1330年頃）まで約660年間続き、60人余りの斎王の名が残る。

斎宮（さいくう、いつきのみや）

斎王の宮殿と斎宮寮のあったところ

斎王	天皇
豊鋤入姫（とよすきいりひめ）	崇神・垂仁
倭姫（やまとひめ）	垂仁・景行
五百野（いおの）	景行
伊和志真（いわしま）	仲哀
稚足姫（わかたらしひめ）	雄略
荳角（ささげ）	継体
磐隈（いわくま）	欽明
菟道（うじ）	敏達
酢香手姫（すかてひめ）	用明～推古

時代	斎王	在任期間	天皇
飛鳥	大来（おおく）	673～ 686	天武
	当耆（たき）	698～ 701	文武
	泉（いずみ）	701～ 706	文武
	田形（たかた）	706～ ?	文武～元明
	[多紀]（たき）	?	元明
	[円方]（まどかた）	?	元明
奈良	[智努]（ちぬ）	?	元明
	久勢（くせ）	?	元正
	井上（いのうえ）	721～ ?	元正～聖武
	梶（あがた）	? ～ 749	聖武
	小宅（おやけ）	749～ ?	孝謙
	山於（やまのうえ）	758～ ?	淳仁
酒人（さかひと）	772～ ?	光仁	

出所：斎宮歴史博物館HP

[]: 実在を確認できない

内宮の祭神

内宮の祭神「皇大神宮儀式帳」

天照坐皇太神。所稱天照意保比流寶命。
同殿坐神。二柱。坐左方。稱天手力男神。靈御形弓。
坐右方。稱萬幡豐秋津彥命也。

外宮の祭神「延喜式」

沼木郷山田原に在り。大神宮を西に去ること七里。豊受大神一座、相殿神三座、
外宮については、やはり伊勢大神宮式に「度会宮四座（度会郡
神名式に「度会宮、四座（相殿神に坐す神三座、

延喜式内 山陰道一之神社

丹後一宮 元伊勢 龍神社

ひこほあかりのみこと
主祭神 彦火明命

別名を天照国照彦火明命ともいい天孫邇邇藝命の兄弟神。天祖から息津鏡・邊津鏡を賜り、海の奥宮である冠島に降臨され、丹後・丹波地方に養蚕や稲作を広め開拓された神様。

相殿

とようけおおかみ
豊受大神

あまてらすおおかみ
天照大神

わたつみのかみ
海神

あめのみくまりのかみ
天水分神

伊勢神宮の謎 解明編

「天照大神」について

天照大神の正体

- ①卑弥呼と異なる実在人物をモデルとして創作された神
- ②卑弥呼をモデルとして創作された神
- ③創作された神

三貴子の名前のバリエーション

	スサノオ	ツクヨミ	アマテラス
古事記での表記	建速須佐之男命 速須佐之男命 須佐之男命	月読命	天照大御神
日本書紀での表記	素戔嗚 神素戔嗚尊 速素戔嗚尊	月の神 月弓命 月夜見尊 月読尊	天照大神 天照大日靈尊
出雲風土記での表記	神須佐能袁 須佐能乎	-	-
神社祭神名	素戔嗚 須佐之男 素戔嗚 素佐之男 素沙男 素狭男	右月読 左月読 中月夜見 月弓 月 月夜見 月夜見姫 月夜美 幸魂月夜見 津気夜見 天月読	天照

内宮の祭神「皇大神宮儀式帳」

天照坐皇太神。所稱天照意保比流寶命。
 同殿坐神。二柱。坐_ニ左方。稱_ニ天手力男神。靈御形弓。
 坐_ニ右方。稱_ニ萬幡豐秋津姬命。一也。

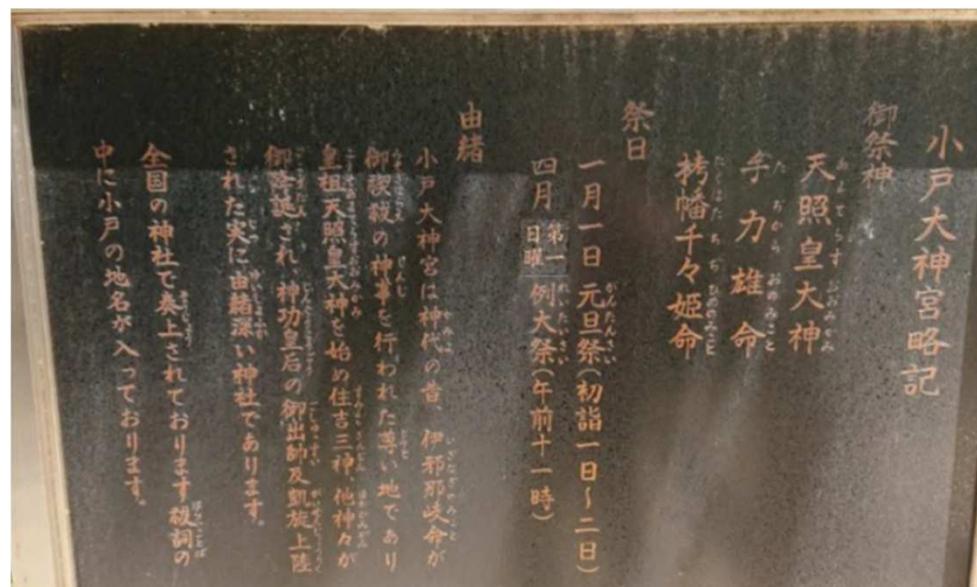
「天照大神」の勧請元候補

小戸大神宮

福岡県早良郡に鎮座。小戸は、イザナキが訪れた黄泉の国から帰還した際に穢れを取り払う禊(ミソギ)を行った地名。古事記には、「竺紫の日向の橘の小門(オド)の阿波伎原」とある。

同社の祭神は、大日靈(オオヒルメ)、手力雄(タヂカラオ)、栲幡千々姫。

同社の略記によれば、「由緒ある霊地であり、形ばかりの小祠があった」「江戸時代では21年ごとに式年遷宮されていた」「神功皇后が半島へ出兵した前後に上陸した」としており、古さを感じる。



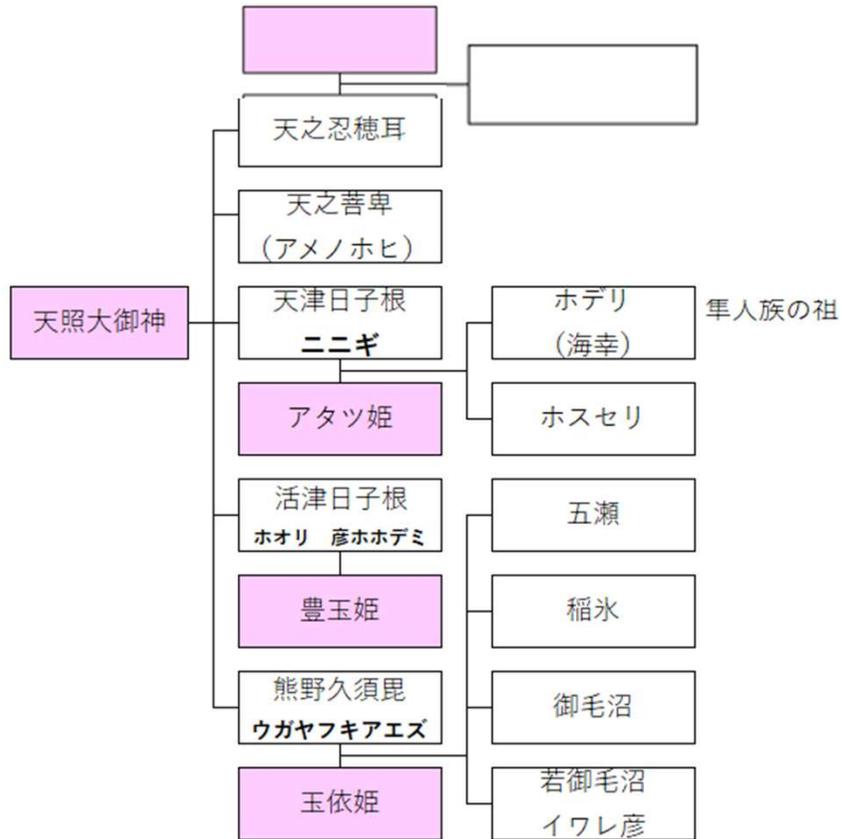
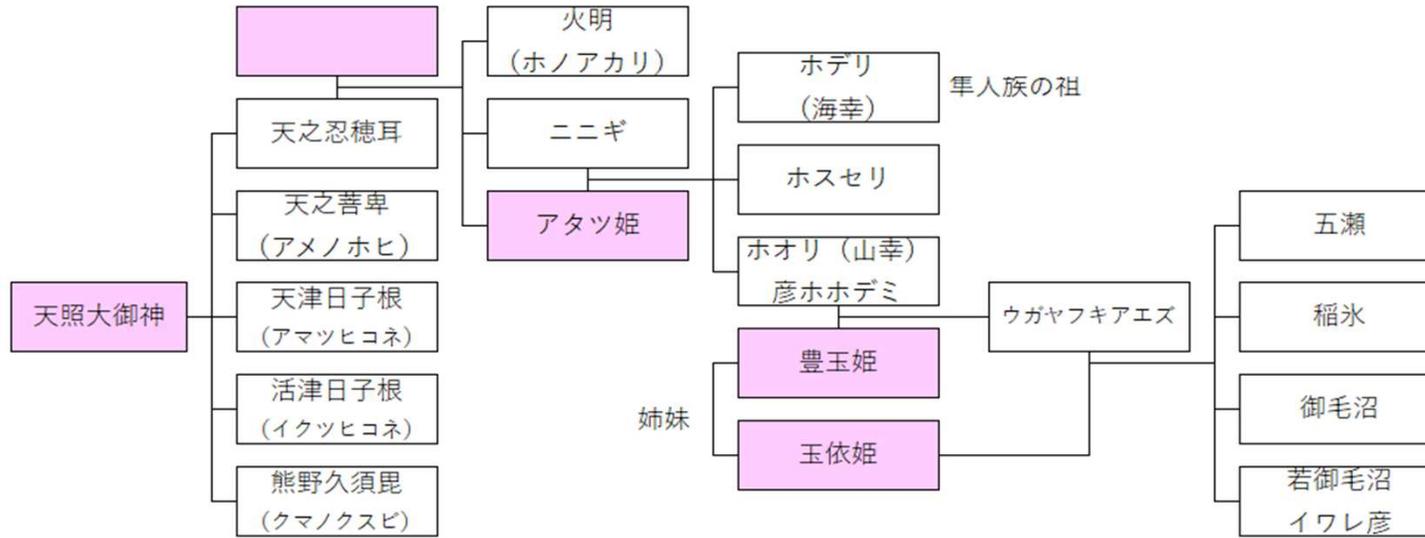
伊野天照(イノテンショウ)皇大神宮

福岡県糟屋郡に鎮座。「九州の伊勢」と呼ばれる。祭神は天照大神、手力雄、万幡千々姫(ヨロズハタチデヒメ)である。トヨアキツ姫は、日本書紀では、栲幡千千(タクハタチジ)姫と呼ばれている。

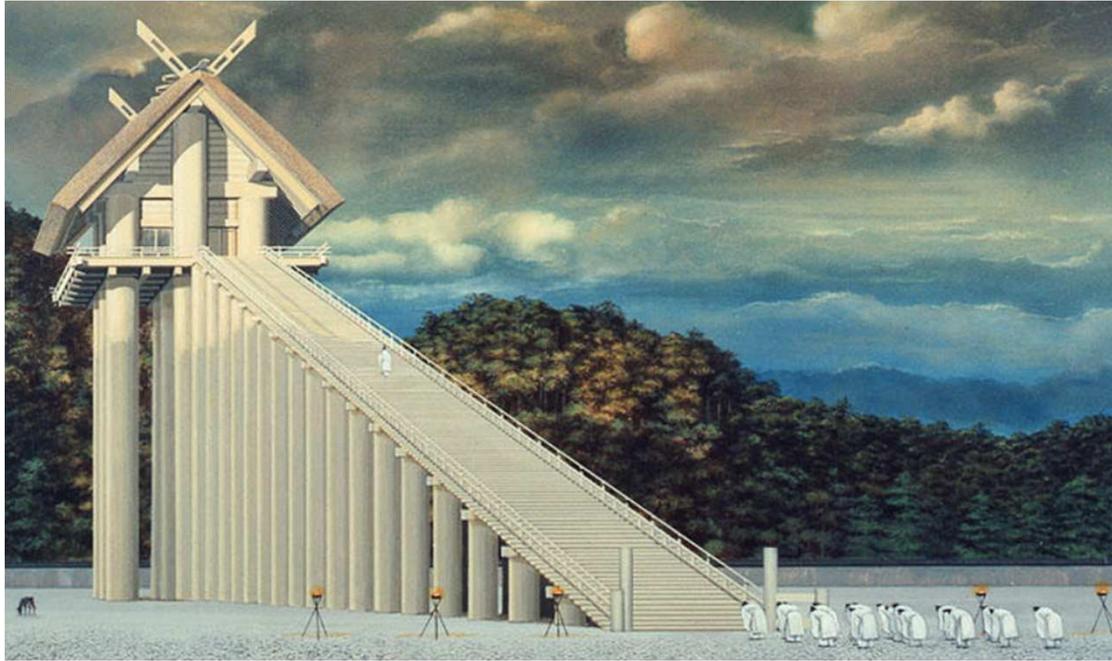
由緒によれば神功皇后(4世紀)が朝鮮出兵前に天照大神を祀ったという伝承がある。



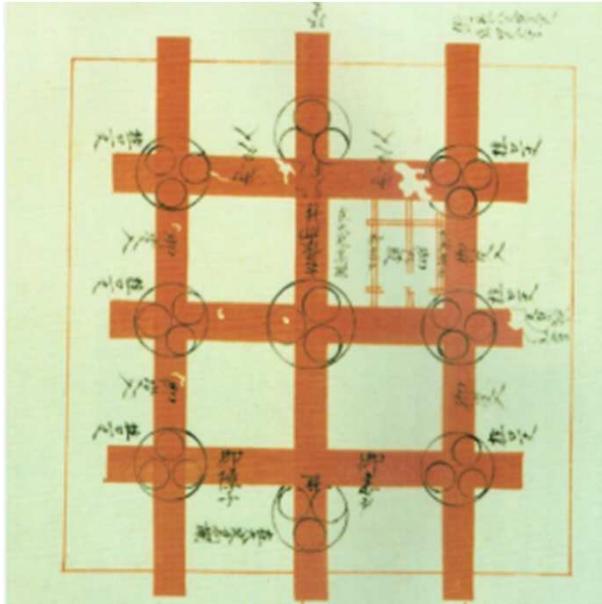
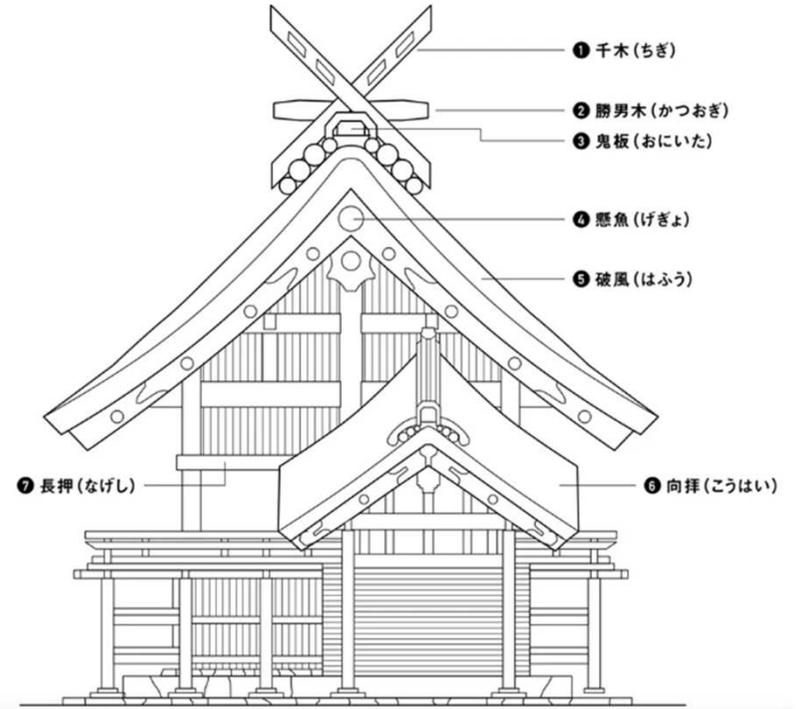
日向三代



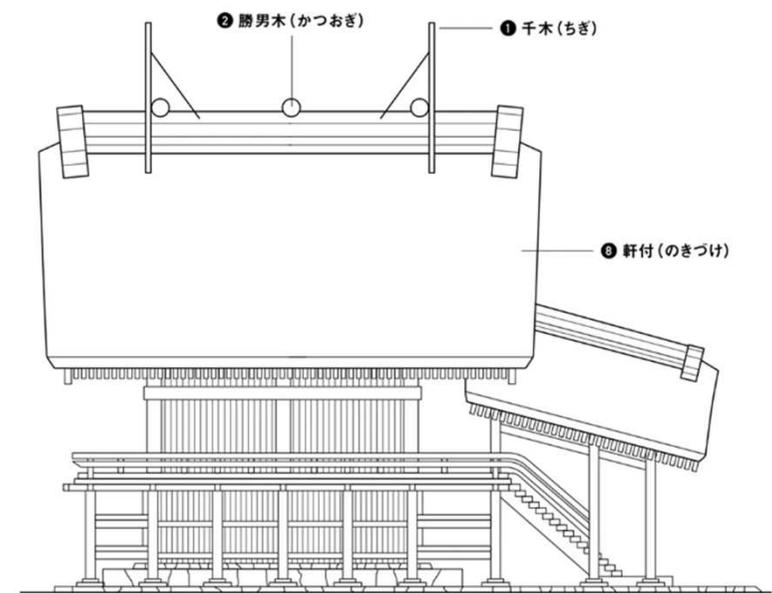
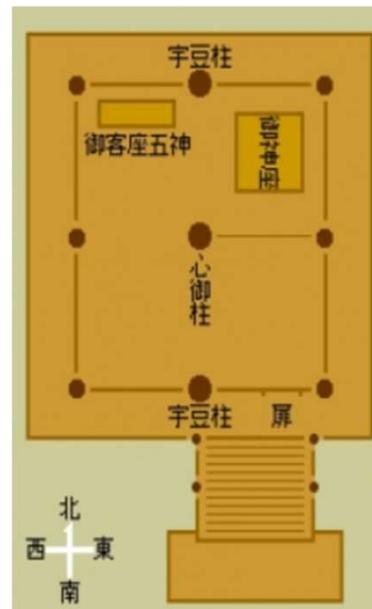
古代の出雲(杵築)大社



出所:「季刊大林」大林組(1988)



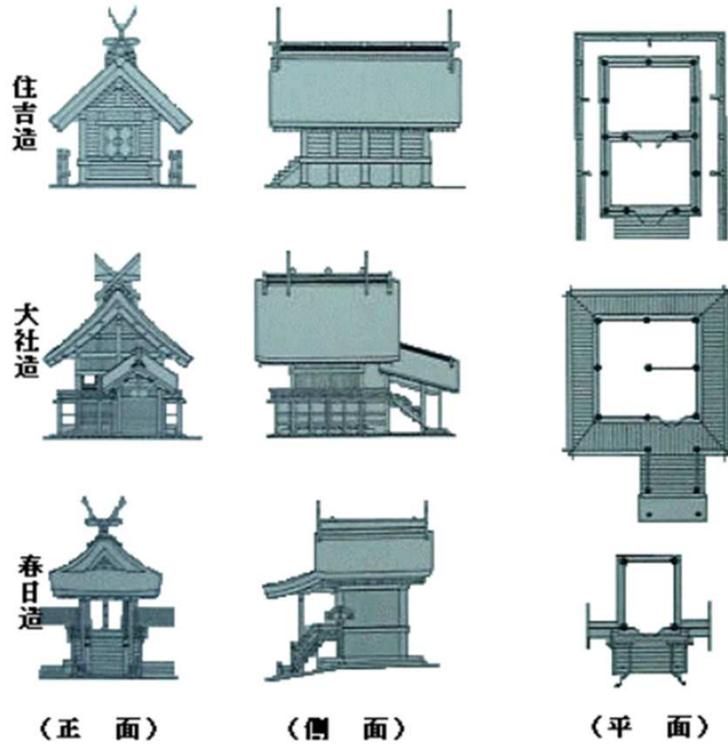
「金輪造営図」



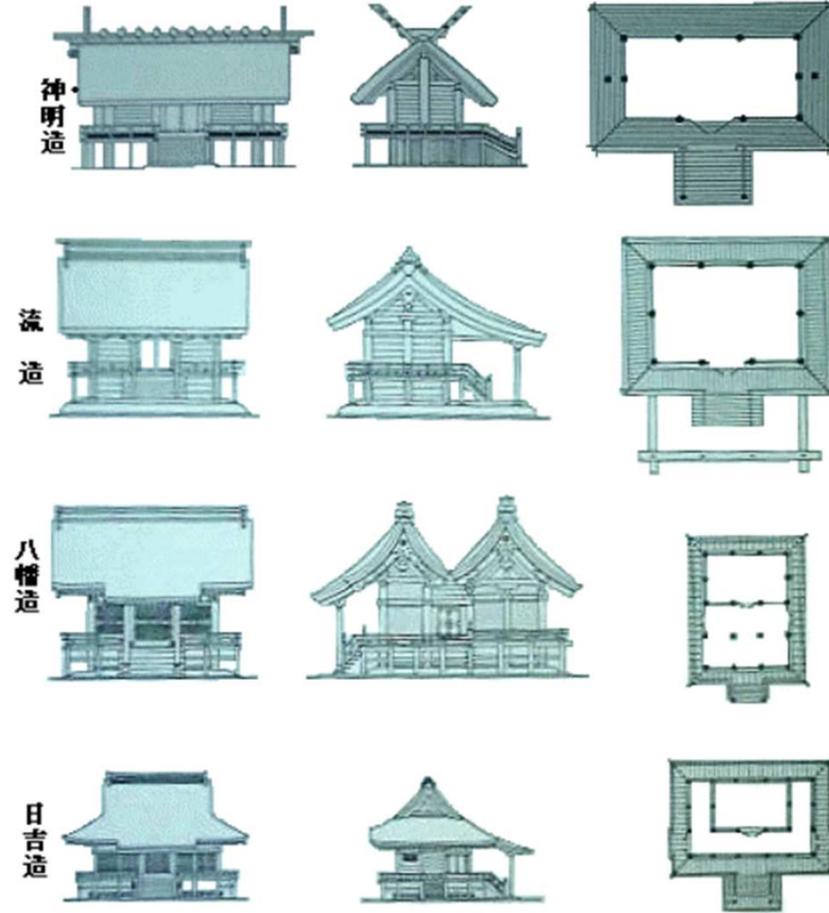
出所:「Discover Japan」別冊「伊勢神宮と出雲大社」(2017年)

神社の建築様式

<妻入り>



<平入り>



出所：「ジュニア版 神社仏閣ミニ辞典—入門篇、神道・民俗信仰の部—」 <https://www.ne.jp/asahi/koiwa/hakkei/sintou.htm>

本殿が大社造の神社

建物名称	間口 (梁行)	奥行 (桁行)	奥行 -間口	建立年代	西暦	所在地
出雲大社本殿	10.96	10.9	-0.06	延享元年	1744	簸川郡大社町大字杵築東
阿羅波比神社本殿	2.442	2.426	-0.016	文化11年	1814	松江市外中原町
伊奈西波岐神社本殿	3.582	3.569	-0.013	寛延2年	1749	簸川郡大社町鷺浦
山代神社本殿	1.983	1.972	-0.011	天保4年	1833	松江市古志原町
出雲大社天前社	3.65	3.64	-0.01	寛文7年	1667	簸川郡大社町大字杵築東
出雲大社御向社	3.65	3.64	-0.01	寛文7年	1667	簸川郡大社町大字杵築東
出雲大社筑紫社	3.65	3.64	-0.01	寛文7年	1667	簸川郡大社町大字杵築東
出雲大社門神社	3.645	3.638	-0.007	寛文7年	1667	簸川郡大社町大字杵築東
売布神社本殿	2.269	2.263	-0.006	嘉永7年	1854	松江市和多見町
許曾志神社本殿	3.15	3.15	0	明治13年	1880	松江市許曾志町
佐太神社正殿	5.46	5.46	0	文化4年	1807	八束郡鹿島町佐陀
佐太神社南殿	4.55	4.55	0	文化4年	1807	八束郡鹿島町佐陀
佐太神社北殿	4.55	4.55	0	文化4年	1807	八束郡鹿島町佐陀
出雲大社素鷲社	4.255	4.26	0.005	寛文7年	1667	簸川郡大社町大字杵築東
阿須岐神社本殿	4.224	4.24	0.016	明治12年	1879	簸川郡大社町遥堪
三屋神社本殿	3.675	3.71	0.035	貞享2年	1685	飯石郡三刀屋町給下
能義神社本殿	4.858	5	0.082	文久3年	1863	安来市能義町
須佐神社本殿	4.247	4.422	0.175	文久元年	1861	簸川郡佐田町宮内
朝山神社本殿	2.61	2.864	0.254	大正2年	1913	出雲市朝山町
須我神社本殿	2.73	2.995	0.265	元治2年	1865	大原郡大東町須賀
比布智神社本殿	4.256	4.541	0.285	天保3年	1832	出雲市下古志町
佐香神社本殿	3.035	3.325	0.29	明治25年	1892	平田市小境町
玉作湯神社本殿	2.83	3.17	0.34	安政4年	1857	八束郡玉湯町玉造
長浜神社本殿	3.647	4	0.353	明治4年	1871	出雲市西園町
内神社本殿	4.314	4.668	0.354	安政6年	1855	松江市大垣町
八重垣神社本殿	3.818	4.424	0.606	安政6年	1859	松江市佐草町
神魂神社本殿	5.15	5.76	0.61	天正11年	1583	松江市大庭町
真名井神社本殿	4.121	4.848	0.727	寛文2年	1662	松江市山代町

(主に『鳥根県近世社寺建築緊急調査報告書』〔鳥根県教育委員会、1980年〕による)

出所：黒田龍二「纏向から伊勢・出雲へ」学生社

古代文献に見る伊勢神宮の歴史

時期	出所	記述
天孫降臨	古事記	天照大神と思金は、五十鈴宮に鄭重に祭ってある。登由気神は、度会の外宮に鎮座している。手力男は、伊勢の佐那那県に鎮座している。猿田毘古は、阿耶訶におられるとき、漁をしていて、比良夫具にその手をはさまれて、海水に沈み溺れなされた。
天孫降臨	日本書紀	猿田彦が答えた。「私は伊勢の狭長川の五十鈴の川上に行くでしょう」
垂仁紀	古事記	倭姫が伊勢の大神宮を祭った。原文：倭比賣命者、拜祭伊勢大神宮也。
垂仁紀	日本書紀	天照大神を豊相入姫命から離して、倭姫命に託された。倭姫命は大神を鎮座申し上げるところを探し、宇陀の篠幡に行った。さらに引返して近江国に入り、美濃をめぐって伊勢国に至った。そのとき天照大神は、倭姫命に教えて言われたのが、「伊勢国はしきりに波が打ち寄せる、傍国の美しい国である。この国にいたいと思う」。そこで大神のこぼのままに、その祠を伊勢国に立てられた。そして齋宮を五十鈴川のほとりに立てた。これを磯宮という。天照大神が、初めて天より降りられたところである。一説には、天皇は、倭姫命を依代として、天照大神に差し上げられた。それで倭姫命は、天照大神を磯城の神木の本にお祀りした。その後、神のお告げにより、二十六年十月、甲子の日、伊勢国の渡遇宮にお移した。
景行20年	日本書紀	五百野皇女を遣わして、天照大神を祭らせた。
景行紀	古事記	勅命を受けて東国に下って行かれるとき、伊勢神宮に参って、神殿を礼拝し、やがてその叔母の倭比売に述べた。(略)倭比売は草薙剣をお授けになり、… 原文：故受命罷行之時、参入伊勢大御神宮、拜神朝廷、即白其姨倭比賣命者 (略)倭比賣命賜草那藝劔那藝二字以音
景行40年	日本書紀	冬十月二日、日本武尊は出発された。七日、寄り道をして、伊勢神宮を拝まれた。倭媛命にお別れの言葉を述べ、「今、天皇の命を承って東国に行き、諸々の反乱者を討つことになりました。それで、ご挨拶に参りました」。 倭媛命は草薙剣を取って、日本武尊に授けて言われた。「よく気をつけ、決して油断をしないように」
雄略元年	日本書紀	稚足姫皇女をお生みになった。この皇女は伊勢大神祠の齋宮となられた。
雄略21年	止由氣宮儀式帳	雄略天皇の夢に天照大神が現れ、「自分一人では食事が安らかにできないので、丹波国の等由気大神を近くに呼び寄せるように」と神託。大神宮諸雑事記の第一「雄略天皇」の条に「即位廿一年丁巳」、すなわち雄略天皇21年とある
継体元年	日本書紀	竟角皇女(ささげ)をお生みになった。この人は伊勢大神祠の齋宮をされた。
欽明2年	日本書紀	第一を大兄皇子といい、第二を磐隈皇女という。当初は伊勢大神に仕えられた。後に、茨城皇子に犯されたので解任された。
敏達7年	日本書紀	うじきの皇女を伊勢の祠とした
敏達14年	日本書紀(用明紀)	須加手姫皇女を伊勢神宮に遣わし、齋宮として天照大神にお仕えさせられた。この皇女は、この天皇の御時から推古天皇の御代まで皇大神宮にお仕えし、後年、母の里の葛城に退いて亡くなられた、と推古天皇紀に見える。ある本に、この皇女は三十七年間も大神にお仕えした後、自ら退いて亡くなられたとある。
天武元年	日本書紀	六月二十六日、朝、朝明郡(三重県三重郡)の迹太川(とおかわ)のほとりて、天照大神を遷座された。
天武2年	日本書紀	夏四月十四日、大来皇女を伊勢神宮の齋王にされるために、まず泊瀬の齋宮にお住ませになった。ここはまず身を潔めて、次第に神に近づくためのところである。
天武	二所太神宮例文	「常限二廿箇年、一度新宮遷奉。造宮使長官一人、次官一人、判官一人、主典二人、木工長上一人、番上工珊人参入来。」 (常に二十年を限りとして、一度新宮へ遷し奉る。造宮使として長官1名、次官1名、判官1名、主典2名、木工長上1名、番上工らが参向する。)
天武	太神宮諸雑事記	「二所太神宮之御遷宮事、廿年一度應奉令遷御、立爲長例也云々」(二所太神宮の遷宮のことは、20年に一度遷御を行うべきであり、これを永く変わらぬ例とする)(朱雀3年)
持統4年	二所太神宮例文	太神宮御遷宮(白鳳13年)
持統4年	太神宮諸雑事記	太神宮御遷宮
持統6年	二所太神宮例文	外宮御遷宮(朱鳥2年)
持統6年	太神宮諸雑事記	豊受太神宮遷宮
持統6年	日本書紀	二月十一日、諸官に詔して、「三月三日に伊勢に行こうと思う」。この取りきめに関した陰陽博士である沙門法蔵、道基に、銀二十両を賜わった。この日、中納言直大貳である三輪朝臣高市麻呂が、上奏して直言し、天皇の伊勢行幸が、農時の妨げになることを諫め申した。 三月三日、浄広肆広瀬王、直広参当麻真人智徳、直広肆紀朝臣弓張を、行幸中の留守官に任ぜられた。このとき、中納言の大三輪朝臣高市麻呂は、職を賭して重ねて諫め、「農繁の時の行幸は、なさるべきではありません」 六日、天皇は諫めに従われず、ついに伊勢に行幸された。
文武2年	続日本紀	多氣大神宮を度会郡に移す

伊勢神宮の様々な表記 五十鈴宮、伊勢大神宮、伊勢大神祠